

Cesalli, Laurent and Nadja Germann. 'Signification and Truth Epistemology at the Crossroads of Semantics and Ontology in Augustine's Early Philosophical Writings'. *Vivarium*, 46 (2008), 123-154.

上村直樹

本論文は、知識や真理の問題を論ずるにあたって分節されうる二つの観点—記号やその意味、真理との連関についてあつかう言語学的・意味論的な観点と、記号の指示対象、その存在論的な次元や真理との連関についてあつかう存在論的な観点—から、アウグスティヌスの真理概念、とりわけその理解の鍵となる「意味」について考察することを試みている。そして、知識の伝達可能性や感覚認識を通しての知識の獲得に関して、アウグスティヌスが想定されている以上に懐疑論者との距離をとっていたことを明らかにするために、*Contra Academicos*、*De dialectica*、*De musica* を取りあげる。第一に、意味論的・言語論的な観点からの考察においては、アカデメイア派に対峙するアウグスティヌスの立論の漸進的な変化が検証される。アウグスティヌスは記号概念を検討することによって、それがストア派の認識論上の諸要素を統合し、言語上の諸表現を介する知識の伝達に適した機能を有することを明らかにしている。第二に、指示された感覚的な諸事物の存在論的な構造について、また数学を例にとって明示される同語反復命題についての議論が検討されることによって、その場合もまた記号概念が要にあることが明らかにされる。そして、感覚的な諸事物の認知に拘泥する懐疑主義との対峙は、この記号と意味の概念によって乗り越えられたことが確認される。